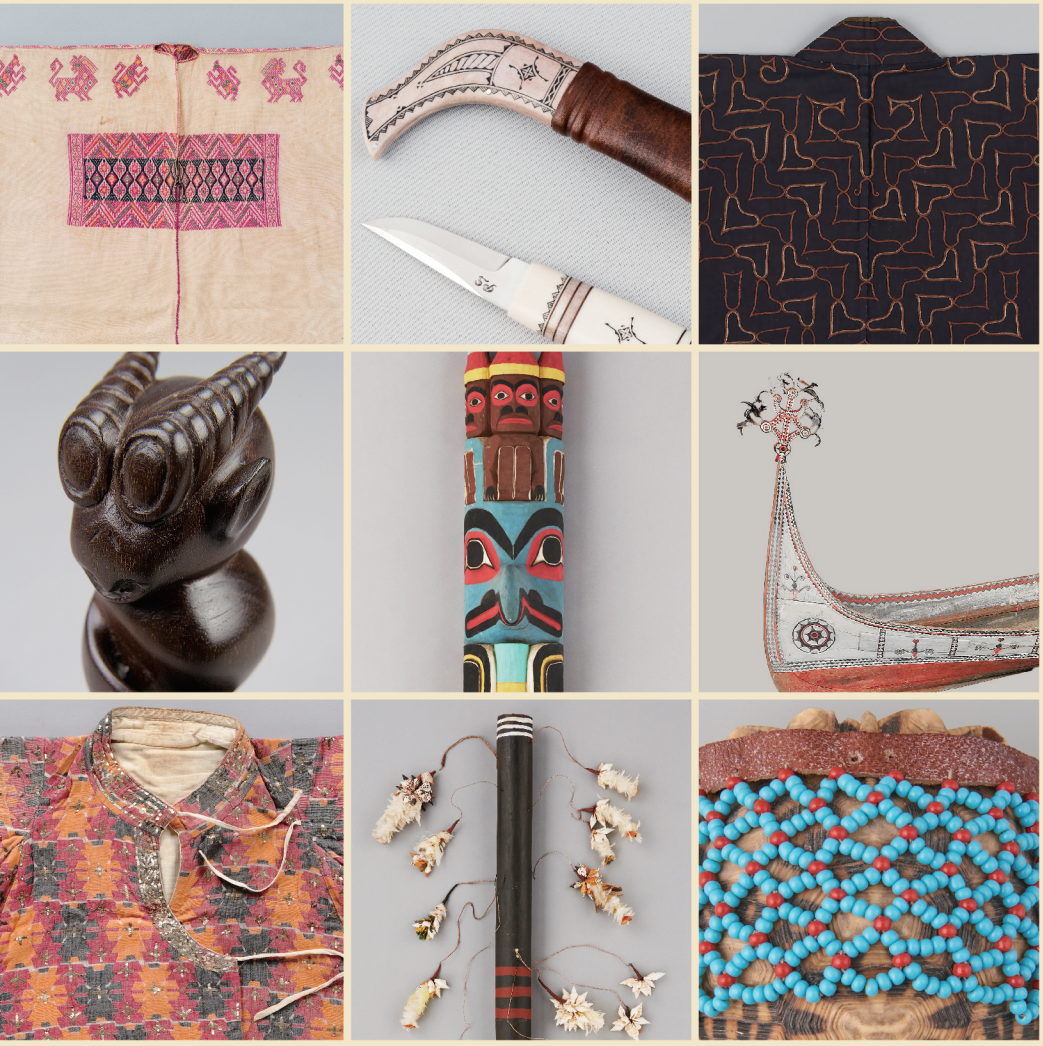
国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
令和2年3月1日発行　第44巻第3号通巻第510号

月刊みんぱく

2020 3月号

特集

先住民とアート



先住民の思いをのせて　信田敏宏
サーミの工芸、アート、ヨイク　ロッセッラ・ラガッツィ
カナダ先住民のトーテムポール制作とその地域産業化　岸上伸啓
公共空間でのアイヌ文化の発信　齋藤玲子

窓から拡がる世界

戸田 正寿

プロフィール
1948年福井県生まれ。アートディレクター。伊勢丹のロゴマークや丸井今井のショッピングバッグをデザイン、北海道洞爺湖サミットの会場のアートディレクションなどを手がける。個展・展覧会を各地で開催するほか、作品はニューヨーク近代美術館など海外の美術館にも所蔵されている。ブルノ国際グラフィックデザインビエンナーレグランプリなど受賞も多数。

二〇一七年、北海道、札幌のデパート丸井今井からショッピングバッグのデザインを依頼されました。依頼を受けてすぐに、以前から興味があり魅了されていたアイヌの人達の文化と結びつけたいと考えました。アイヌ民族は日本人とはまったく違った文化を持っています。北海道に生まれて育ってきた独自の文化なのです。私は刺繍の模様に注目して作家の津田命子さんの作品を使わせていただき、ショッピングバッグをデザインいたしました。アイヌの模様の中からハートに見える形を選び、新しく展開しました。この形は親しみやすく愛を感じさせます。北海道から発信するシンボルができたと思います。

その昔、北海道から北前船で繋がっていた私の故郷・福井県坂井市の港町、三国町。海を見渡せるその高台にブリリアント・ハート・ミュージアム雄島があります。二〇一八年に開館したこの美術館には大きな窓を作りました。窓の外には地元では「神の島」と呼ばれ、一〇〇〇年を越えて斧を入れられた事がない、深い森に覆われた無人の島「雄島」と日本海の波、そして空と雲が拡がります。美術館にいると喜びと恐ろしさを感じて不思議な体験ができます。

また、晴れた日の美術館では、私が考えたクリスタル「Seiju カット」が太陽の光をとらえ、特別な光による予想できない虹のパラダイスを作り出します。空間を覆うとりどりの虹は時間とともに変化を続け、日の出から太陽が沈むまで、ここに立つ人へ物語を語りかけるのです。この空間の中でゆっくり自然と語らいながら時を過ごせば身体と心が癒やされていきます。

町を行き交う人々が手にする北海道のショッピングバッグ。高台にたつ福井県の美術館の窓。私はこのふたつがみなさんにとって世界の窓になればと思っています。

「人々はそこに何を見るのだろか」

窓がキャンバス、窓の中に映るものが作品です。

月刊 みんぱく
3月号目次

1 エッセイ 千字文
窓から拡がる世界
戸田 正寿

特集 先住民とアート

2 先住民の思いをのせて
信田 敏宏

4 サーミの工芸、アート、ヨイク
ロッセッラ・ラガッツィ

6 カナダ先住民のトーテムポール制作とその地域産業化
岸上 伸啓

8 公共空間でのアイヌ文化の発信
齋藤 玲子

10 ○○してみました世界のフィールド
修道院文書館での史料調査
清水 有子

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
メンディビルの首長人形
八木 百合子

16 みんぱく回遊
回回は天下に遍し
奈良 雅史

18 対談「能と怪異 辰巳満次郎×吉田憲司」

21 次号予告・編集後記

特集

先住民とアート

今日、先住民の技能や意匠、制作物は、芸術作品などに見られるモチーフを含め、多様な形で注目され、展開を見せている。先住民の物質文化・芸術活動はどのような道をたどり、外部社会とどのような影響を与えあってきたのか。本特集ではその一端を紹介したい。

特別展　先住民の宝

会期　三月一九日（木）～六月二日（火）

場所　特別展示館

先住民の思いをのせて

信田敏宏（のぶた としひろ）
民博 グローバル現象研究部

世界には、現在、七〇カ国以上の国々に、約三億七〇〇〇万人の先住民が暮らしており、民族の数は少なくとも五〇〇〇といわれている（国連のホームページより）。西欧列強の植民地化などにより、先住民は苦難の歴史を歩んできたが、現在においてもなお、圧政や差別に苦しむ先住民がいる。

特別展「先住民の宝」では、国立民族学博物館に所属する研究者の最新の研究成果をもとに、九つの国や地域に暮らす先住民を紹介している。具体的には、オーストラリアのアボリジニ、マレーシアのオラン・アスリ、台湾のタオ、ネパールのアーディバーシー、グアテマラのマヤ、アフリカのサンとソマリ、カナダの北西海岸先住民、北欧のサーミ、日本のアイヌなどである。そして、「宝」という概念を共通のテーマとしながら、これら先住民の歴史や現在の暮らし、彼らが抱える問題や国家の課題など、彼らを取り巻く状況をさまざまな角度から紹介している。

本特別展でいう「宝」とは、いわゆる金銀財宝ではない。それは、家族や親族かもしれないし、気の合う仲間かもしれない。海や森などの自然環境や生活用具の場合もあるだろう。祭りや儀礼、伝統芸能、あるいは、彼らの心のなかにある民族の誇りや、この世には存在しない精霊や祖先かもしれない。いずれにしても先住民の宝とは、彼らの日々の生活にあたたかな光を与えるものであることは確かである。

先住民の世界へ

展示場に足を踏み入れると、まず目に飛び込んでくるのは、世界の先住民の写真である。そこには、大草原やジャングル、白銀の世界や高山に暮らすさまざまな先住民の姿が映し出されている。民族衣装に身を包んだ人びとや、家族に囲まれて微笑む彼らを見ていただき、今までよりも少し身近に彼らを感じてもらえればと思っている。展示場一階はこの「世界の先住民」コーナーを取り囲むように、アボリジニからサーミまで八つのコーナーが作られていて、二階はアイヌのコーナーとなっている。

アボリジニのコーナーには、独特の色合いをもつ樹皮画や点描画などのアート作品、森の民オラン・アスリのコーナーにはユニークな表情を見せる精霊の彫像や仮面、海の民タオのコーナーには彼らの生を支える漁具類が展示されている。多様な民族が暮らすネパールのコーナーでは民族の特徴を示す民族衣装や神像を展示し、マヤのコーナーでは近年問題になっている衣装デザインの権利についても触れている。アフリカのコーナーではサンとソマリを取り上げ、岩絵や狩猟具、さらには海の権利についても紹介されている。

アイデンティティとしてのアート

本特集で紹介される北欧のサーミ、カナダ北西海岸先住民、日本のアイヌといった、北半球の北方に暮らすこれら先住民の共通項をあえてあげるとすれば、従来、日常生活や儀礼などに用いられてきたモノが、アート作品として評価されている点であろう。カナダ北西海岸先住民のトーテムポールはその典型例といえる。先住民が用いていた用具類が人びとを魅了し、その芸術性が広く認められるようになると、今度は、先住民自身が作品としてそれらを制作するようになっていったのである。そうした作品がわたしたちの心にインパクトを放つのは、芸術作品としての価値だけでなく、それらが先住民のアイデンティティを表象するものであり、ひとつひとつの作品に民族の思いが込められているからではないだろうか。北方の先住民に限らず、先住民が伝統的に制作してきたモノが、アートとして評価されている現状は、本特別展においても多く示されている。作品の精巧さや美しさ、素朴さと同時に、民族に受け継がれてきた技と心を感じとってもらえればと思っている。

先住民の宝

このように、先住民の作品がアートとして高い評価を受けたり、彼らが作る工芸品が観光客の人気を集めたりする一方で、現在でもなお安穏とは言い難い境遇に生きる先住民も少なくない。土地を奪われ、住処（すみか）を追われ、生計の手段をも奪われる人びとは後を絶たず、差別や偏見に苦しむ先住民や、自然環境が悪化し生活に不安を感じている先住民も多い。

しかし、圧政や差別に苦しみながらも、彼らは屈することなく日々を力強く生きてきた。そうした彼らにとって、宝は心の拠り所であり、民族としての誇りでもある。そして何よりも宝は彼らにとって希望そのものなのである。特別展「先住民の宝」では、多くの展示品をとおして、先住民の心に触れていただければ幸いである。

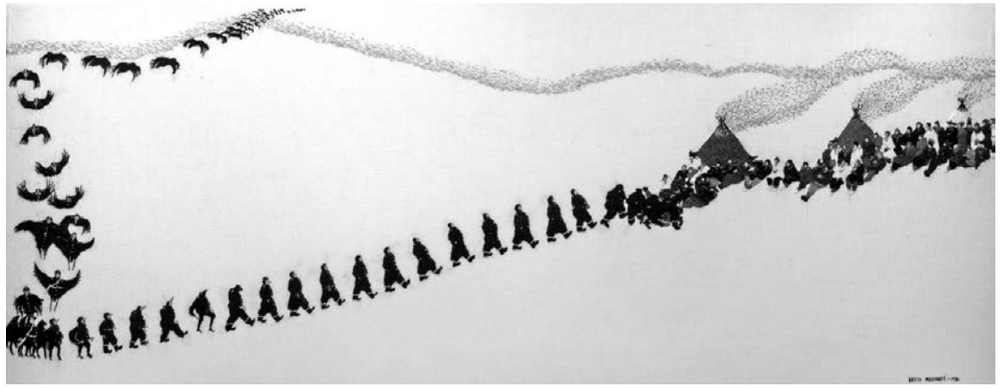
オラン・アスリ（マレーシア、2011年）

マガール（撮影：南真木人、ネパール、2014年）

ケチュア（撮影：八木百合子、ペルー、2006年）

サーミの工芸、アート、ヨイク

ロッセッラ・ラガッツィ
UMAKノルウェー・アークティック大学博物館准教授



B・マラカット=ラッバ作 《カラスたち》 刺繍 1981年
（UMAKノルウェー・アークティック大学博物館所蔵、ウラ・レーエ撮影）
作者はアルタダム反対運動を機に活発なアート運動を始めたマーシのグループの1人。
ダムでの抗議運動を力ずくで制圧した警官隊をカラスにたとえた作品

サーミ芸術の起源

サーミ人の芸術は、北ヨーロッパに多く見られる西暦五〇〇〇年前の狩猟漁労民の儀礼を描いた古代の岩壁画にその起源があるのかもしれない。とはいえ、芸術史の最初の確かな記録は、サーミの儀礼用太鼓に描かれた信仰対象の偶像にさかのぼることができる。しかしシャーマンが儀礼でその太鼓を用いた古代の宗教は、何世紀ものあいだキリスト教宣教師によって迫害されてきたために、サーミ精神の考古学的形象と前世紀に復活したサーミの儀礼的イメージのあいだにギャップがあることは否定できない。

サーミの儀礼用太鼓には絵が描かれており、特殊な歌謡であるヨイクとともに演奏されたらしい。精神的で芸術的な表出は絵と歌で一体化していたわけである。したがって太鼓は、トナカイを素材とする工芸とともにサーミアートの独自の特徴をあらわしているといえる。

サーミアートと工芸

サーミの文化において工芸とアートはわかちがたく結びついている。

イヴェル・ヨクス作 《静かに変わる思考》 彫刻 1994〜1998年
（UMAKノルウェー・アークティック大学博物館所蔵、アドナン・イカイク撮影）
作者は伝統を重視するサーミ工芸をベースとしつつ、挑戦的な作品で彫刻の世界を切り開いてきた。木材と木釘、トナカイの角が上部で輪を構成している

なぜならサーミの人びとは、西欧的・都会的な意味での学術的なアートを生みだすことが許されなかったからである。したがって彼らの芸術的な表現は、半遊牧生活で用いた衣服や道具、用具、居住地をとおしてあらわされることになった。これらの工芸品は民族学の収集品となったが、今でも作られ用いられており、サーミ人であることの誇りを支える精巧な美的感覚を表現している。職人の多くは今日、トナカイ飼育や漁労、狩猟、採集などを含めた伝統生活を継承しているだけではなく、工芸やアートについて大学レベルの高度な知識も有する。

サーミアーティストと政治運動

特にここ五〇年のあいだ、多くのサーミ人アーティストがスカンジナビアやフィンランドの高等教育機関を卒業したが、一九七〇年代以降、アートは政治的な運動と相互に影響を与えあってきた。国家による同化政策への抵抗、先住民の権利や社会的平等を求める闘いは芸術的な表現をともなった。ノルウェー、カウトケイノ近くのマーシでは一九七〇年代、文化活動家トリグヴェ・グットルムセンのよびかけで、シンノヴェ・パルセン、B・マラカット=ラッバ、A・ガウプ、R・パルセン、B・M・ヘッタたちがグループを形成した。これはサーミ地域全体で初めてのアーティストの同業者組合となった。

アルタには、狩猟・漁労・採集社会を描く新石器時代の岩壁画としては北ヨーロッパ最大の集積が見られる。これは1985年にユネスコの世界文化遺産に登録されている
（撮影：南真木人、2019年）

「太鼓をもつシャーマン」
（出典：クニュド・レーム『フィンマルクのラップ人についての解説』、1767年）

さらに当時学生であったシンノヴェ・パルセンは、民族の帰属意識と権利のための闘いの意思表示として、最初のサーミ民族旗を構想し、それはサーミの地のすべての政治的主張を統合するシンボルともなった。そして、一九七九年、オスロのノルウェー国会議事堂前でのハンガーストライキとともに、洪水が起これば地域を襲い、トナカイ飼育に被害を与えうるマーシのアルタダムの反生態的な建設計画について、民衆に警鐘を鳴らす運動の先頭に立つことになった。ストライキは何百人もの活動家たちを二年以上に渡る建設基地の封鎖（一九七九〜八一年）へと導くことになったが、この有名な事件の開始から終わりまでサーミ人アーティストの活動家たちは前線で活躍した。

サーミアートの巨匠、ヴァルケアペー

ニルス・アスラク・ヴァルケアペーはおそらくサーミにおけるもっとも有名なアーティストであろう。彼は映画、視覚芸術、音楽、グラフィックなど、サーミ人がかかわるすべての芸術分野を代表しているといえる。一九四三年にノルウェーとの国境に面したフィンランドのエノンテキヨで生まれ、サーミやヨーロッパ、日本など世界中の多くの先住民の文化の創造にかかわり続けた。マルチメディア音楽や視覚的作品の制作、作詞やイラストを手掛けたほか、世界の多くの博物館に保存されてはいたが、公表されることのなかった先住民の貴重な写真を探査し、自らの詩集とともに発表した。彼はまた、伝統的なヨイク歌謡を現代的なジャズやブルースと組み合わせることもおこなっている。

今日のヨイク

この四〇年間、ヴァルケアペーの偉業のおかげで、ヨイクは現代の歌手の創造力と七〇年以上前から保存されている録音や記録に刺激され、復興の道をたどりつつある。ヨイクは歌手の歌唱力だけではなく、文化的で芸術的な表現力ともかかわっており、また人物や動物、土地、そして経験さえも歌うことで具現化し、人間とそれ以外を結びつけるものであるとされる。マリ・ボイネ、アンテ・ソンビ、サラ・マリエッレ・ガウプ、ラウラ・ソンビ、ソフィア・ヤンノク、マリア・フィエルヘイム、ヴィンメ・サーリ、その他多くの有名なサーミの音楽家たちがヨイクをブルースからロック、インディー、テクノなど、他のジャンルと結びつけており、サーミ音楽芸術の世界への橋渡しの役割を果たしている。

（翻訳・庄司博史）

カナダ先住民のトーテムポール制作とその地域産業化

岸上伸啓（きしがみ のぶひろ）
人間文化研究機構理事、民博 学術資源研究開発センター

北アメリカ大陸北太平洋沿岸にはハイダやクワクワカワクゥなどの先住民が居住している。彼らは北西海岸先住民と総称され、独自の文化を開花させてきた。その文化を代表するのが、ワシやワタリガラス、サンダーバード、ビーバーなどの動物を彫りこんだトーテムポールとよばれる木柱である。

ハイダのトーテムポール建立
（ブリティッシュ・コロンビア州オールド・マセット、2006年8月）

トーテムポールとは何か？

トーテムポールは用途によっていくつかに分類できる。家屋のなかに立てられるものは家柱（かちゅう）とよばれ、家を支える柱である。家屋の正面中央部の外壁の一部として立てるものは家屋柱とよばれる。祖先や特別な出来事を記念するために野外に立てるトーテムポールを記念柱とよぶ。また、墓地に立てるものを墓標柱とよぶ。このほか各村落の境界を示す領域柱などもある。

興味深いことに、一七〇〇年代後半にこの地域を初めて訪れたヨーロッパ人は、野外に立つ大きなトーテムポールを見ていない。もともとは目立たないぐらい小さなものであったらしい。じつはトーテムポールの巨大化は、一八世紀末から一九世紀初頭にかけてのラッコの毛皮の交易が原因であった。交易によって豊かになった人びとは、多数の招待客に大量の食料をふるまい、膨大な量の贈り物をするポトラッチ儀礼をより盛大に、より頻繁に開催するようになった。そのときに建立するトーテムポールを、交易で手に入れた鉄製斧（おの）やのこぎりなどを用いて制作し始めたことから巨大化していった。

ハイダの大型家屋とトーテムポール
（ブリティッシュ・コロンビア州オールド・マセット、2006年8月）

悲しい歴史と文化の復興

カナダ政府は、伝統的なポトラッチ儀礼を放蕩（ほうとう）のきわみと考え、一八五五年から一九五一年まで禁止し、キリスト教化や英語化を進める同化政策を実施した。ポトラッチ儀礼は、トーテムポールや仮面の制作、家族集団が受け継ぐ歌や踊り、口頭伝承と深く結びついており、儀礼の禁止はそれらの喪失を意味していた。この時期に北西海岸先住民文化が消滅の危機に瀕（ひん）した。

しかし、一九五〇年代に入るとカナダ政府は先住民政策を大転換し、儀礼実施の自由を認め、トーテムポールをはじめとする儀礼具などの制作を許可した。このため、北西海岸先住民は文化の復興活動を始めた。

みんぱくのトーテムポールを制作するビル・ヘンダーソンの工房
（ブリティッシュ・コロンビア州キャンベル・リバー、2019年2月）

トーテムポールの制作には技能をもつ人が必要である。ブリティッシュ・コロンビア州の州立博物館や州立大学は、一九五〇年代後半に、古くなったトーテムポールの修復やあらたな制作を支援するようになった。この結果、腕のよい先住民の制作者（以下、作家とよぶ）が徐々に育っていった。

現在でも、死んだ祖父母、父母を記念するためにトーテムポールを制作することがあるが、博物館や地方自治体、個人コレクターに依頼されて制作することが多くなった。特に学校や公立病院などの公共施設の新築を記念して制作する場合が多い。また、姉妹都市との友好を目的として、トーテムポールを寄贈することもある。そして制作依頼が増えるにつれて、トーテムポール制作は地域産業化していった。

ビル・ヘンダーソンと彼が制作したトーテムポール
（ブリティッシュ・コロンビア州キャンベル・リバー、2019年8月）

地域産業としてのトーテムポール制作

北西海岸地域の先住民コミュニティにはそれぞれ一人か二人の腕のよい作家がおり、工房をもっている。彼らは数名の弟子たちとともにトーテムポールを制作するが、六メートル以上ともなると三カ月以上かかる。

トーテムポールなどの制作は、現在の北西海岸先住民コミュニティにおいて観光業や漁業とともに基幹産業のひとつである。先住民作家にとって、依頼を受けてトーテムポールを制作することは、社会的ステータスを示すことであるとともに、大きな収入源となっている。現代のトーテムポールは、北西海岸先住民の文化的象徴であり、また経済的自立化を示す象徴でもある。

みんぱくでは、創設五〇周年をひかえて、あらたなトーテムポールを立てることになった。腕のよい現地の作家にお願いし、二〇一九年九月から制作を開始した。特別展「先住民の宝」開催中の二〇二〇年五月末ごろにみんぱくの前庭に建立する予定である。今回のトーテムポール作りは、現地の若手・中堅の作家の育成や技能の継承にも貢献する。

みんぱくに建立されるトーテムポールの制作風景
（撮影：ウィリアム・ヘンダーソン、ブリティッシュ・コロンビア州キャンベル・リバー、2019年9月）

公共空間でのアイヌ文化の発信

齋藤（さいとう）玲子（れいこ）　民博 学術資源研究開発センター

近年、北海道に行かれた人は、駅や空港などでアイヌ民族の作家の作品展示やアイヌ文化に関するポスター、パンフレットなどをよく見かけると感じるのではないだろうか。それは、国や地方自治体をはじめ、関連団体などがアイヌ文化の紹介に力を入れているからである。

地下鉄さっぽろ駅構内にできたミナパ。中央は貝澤徹さん制作のシンボルオブジェ（2019年）

二〇〇七年に国連総会で「先住民族の権利に関する宣言」が採択され、翌二〇〇八年に日本の衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択されると、アイヌに関する施策は加速度的に進んだ。来たる四月二四日にオープン予定の国立アイヌ民族博物館を含むウポポイ（民族共生象徴空間）もそのひとつだ。さまざまな事業がおこなわれてきているが、何よりまず重要なのは、アイヌの歴史と文化について多くの人に知ってもらうことと言えるだろう。昨年、施行された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」の基本理念を引用すれば、「アイヌ施策の推進は、（中略）我が国を含む国際社会において重要な課題である多様な民族の共生及び多様な文化の発展についての国民の理解を深めることを旨として、行われなければならない」とある。アイヌ民族のためだけの施策ではなく、「全ての国民が相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資することを目的」としているのである。

まちづくりとアイヌ文化

長い題名の法律やその引用から始まってしまったが、そう大上段に構えなくても、異なる文化を知る・触れるのが楽しいことは、読者の皆さんはよくご存じだろう。街中で見ることができるアイヌ文化について、ここ一〇年ほどのおもなものを紹介しよう。

二〇一一年三月に、札幌市営地下鉄南北線さっぽろ駅と大通駅間をつなぐ地下通路が開通した。JR札幌駅と地下鉄すすきの駅までが地下で一直線に結ばれたことになり、一日に一〇万人を超す人がとおるという。この開通に合わせて、アイヌ文様の刺しゅうをほどこしたタペストリーや、札幌をはじめとするアイヌ語由来の地名、アイヌの伝統的な衣食住などについて日本語・英語・中国語・韓国語で書かれた解説パネルが展示された。やや薄暗い地下空間も、華やかなタペストリーによって明るくなり、急増している外国人旅行客にもアイヌ文化を知ってもらうことのできる貴重な場となっている。

札幌駅前通地下歩行空間に展示されているタペストリー。2011年の当初の展示では作家名はなかったが、あらたに市民と共同で制作した作品には作家らの氏名が明記されている（2019年）

新千歳空港のロビー（2015年）

「イランカラプテ」キャンペーン

二〇一三年には、アイヌ語のあいさつ「イランカラプテ」（「こんにちは」にあたる丁寧な言い方）を「北海道のおもてなし」のキーワードとして普及させるキャンペーンが始まった。この事業を担っているのは、国、自治体、大学などの学術機関、アイヌ関係団体と民間企業により構成される推進協議会で、特に北海道観光の魅力のひとつとしてアイヌ文化をPRする取り組みを進めている。新千歳空港のロビーの天井から下げられた大きな垂れ幕には「アイヌ文化とともに、未来へ。」のコピーがしっかりと書かれた。キャンペーンの一環として、道内の他の空港やJR駅構内などにも工芸品を展示するギャラリーやアイヌ文化紹介コーナーが設置されるようになった。

一九六〇年代から七〇年代にかけての北海道観光ブーム時にも、アイヌに関するさまざまなものごとが観光に取り込まれたが、アイヌ文化に対する誤解や差別が生じ、無関係なものを「アイヌ民芸品」として販売するなどの行為が横行したため、北海道ウタリ協会（当時）は道庁に是正を求め、一定の成果を引き出した。それから三〇余年を経て、民学官連携によるアイヌ文化普及活動が始まったわけである。

2014年に「イランカラプテ」キャンペーン事業の一環として函館空港に設置された「アイヌ工芸資料展示コーナー」（2019年）

アートと最新技術を楽しむ空間

昨年三月には、先に書いた札幌の地下歩行空間につながるさっぽろ駅構内に「アイヌ文化を発信する空間」（愛称「ミナパ」（アイヌ語で「大勢が笑う」という意味））がオープンした。みんぱくのアイヌの文化展示場にも作品がある貝澤徹（かいざわとおる）さん制作のシンボルオブジェ「IWOR-UN-PASE-KAMUY（その場所を見守る尊い神）」をはじめ、現代のアート作品を間近で見ることができる。画期的なのは、インタビューやアニメーション作品などさまざまな映像が大型のメインシアターでつねに流れ、上からのぞくスタイルのテーブル型の機器では一八世紀のアイヌの生活がCGで再現され、手をかざすと解説が流れるなど、体験型のコンテンツが充実していることである。『月刊みんぱく』二〇一九年一二月号で北原モコットゥナシさんが紹介したとおり、アイヌ語の天気予報などもあり、柱に設置された複数のタッチパネルモニターでは、クイズやアイヌ関連の催しの情報検索など、能動的に楽しむことができる。

アイヌ文化は博物館だけではなく、街中や交通機関の待ち時間にも触れられるものになってきている。公共空間における展示と博物館の展示、それぞれの強みを活かしてすみわけるのもよいし、連携という展開も考えてみたい。

○○してみました世界のフィールド

修道院文書館での史料調査

清水 有子（しみず ゆうこ）
明治大学文学部准教授

海外における調査は一筋縄でいかないことが多く、その際に重要となるのは人づきあいだ。良好な関係を築ければ、予期せぬ成果を得られることもある。そんな経験を歴史研究者の筆者が紹介する。

イエズス会文書館にほど近い、バチカンのサンピエトロ寺院前の筆者

筆者の仕事

歴史研究者である以上、史料の調査と収集は大事な仕事のひとつである。わたしの専門は近世日本の対外交渉史、キリシタン史であり、テーマの関係上、日本の古文書だけではなく、一六～一七世紀に来日したイエズス会士など、ヨーロッパ人修道士が日本についてしるした報告書等も扱っている。このため日本史畑ではあるが、定期的に海外、おもにヨーロッパとフィリピンへ史料調査に赴いている。

それなりに経験を積んだ今でも、海外のとりわけ教会関係の文書館では必ず想定外の事態が起こり、「とりあえず行ってみないとわからない」と思うことは、いまだに多い。以下では、二〇一九年三月に訪れたイタリア、スペインのカトリック修道院文書館での史料調査を紹介してみたい。

ローマのイエズス会文書館

最初に紹介するのは、イエズス会本部付属の文書館である。わたしの研究にとって、日本のキリシタン時代のイエズス会士の手で書かれた書簡の原本を見ることができるという点で、たいへん重要なところである。

入館すると、閲覧前にアーキビストと面接し、紹介状を提示して、研究課題を説明しなければならない。この手続きはヨーロッパの文書館では大抵どこにもあるが、日本では用紙に記入するだけである。不慣れなわたしはいつも緊張してしまうが、話に応じて知らなかった関係史料を紹介してくれることもあり、この段階でアーキビストとどれだけ仲良くなれるかが、結構重要なポイントである。

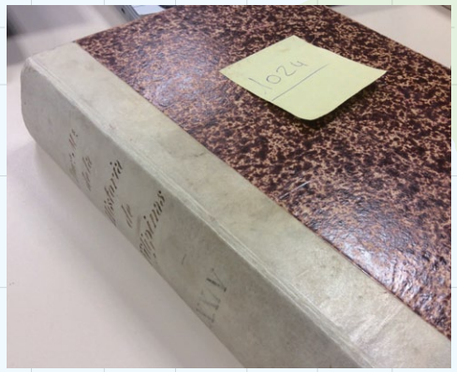
ローマのイエズス会文書館付近。文書館は左手通り奥にある
（写真はすべて 2019 年）

閲覧室の三分の一はパソコンスペースになっている。二〇年ほど前に初めて訪れたときは、請求すると簡単に原本を見せてくれたが、最近は基本的にパソコンでデジタル画像を閲覧する体制に変わった。原本を見たければ、逐一スタッフにその理由を説明しなければならない。書簡の料紙には和紙もあり、それらの保存状態は比較的良いが、それ以外のものは手にとるたびパラパラと紙屑（かみくず）が落ちて明らかに破壊が進む。だからこの措置は仕方ない。それはわかっているのだが、原本に直接触れることがこの仕事の醍醐味と思っている歴史家としては、葛藤を禁じ得ない。原本を見て初めてわかる事も結構多い。

史料の複写

史料複写を依頼すると、デジタル画像化が進んでいるのですぐにその場でUSBに入れてくれる。しかしそれは一枚一ユーロという高額な写真代を支払ってのことである。またインターネット上で簡単に送金でき、注文が少量であればその日のうちに写真をくれる。大量になった場合は、仲良くなったアーキビストが館長に割引を交渉してくれることもある。やはり人間関係は大事だ。そしてこういう柔軟な対応は、私設である修道院文書館の良いところである。

同じイエズス会系でもバルセロナの文書館では、自分で文書をデジカメ撮影して複写してもよい。しかも、何枚撮影しても、一切無料である。文書館によってルールや雰囲気がガラッと変わるのも、私設文書館の魅力だ。ここにはたった一人の老修道士アーキビストが駐在しており、一週間通ったが、閲覧者は毎日わたし一人のみ。開館時間は午前の三時間のみ。一週間部屋で一人ひたすらにシャッターを押し続ける調査となった。


バルセロナのイエズス会文書館でひたすら撮影した写本

史料調査とは？

修道院調査では、私設ゆえの制約が多いと感じるところもある。ローマのトラステベレ付近にあるドミニコ会修道院文書館もまた、アーキビスト修道士二人の体制であった。フィリピン出身の若い彼は明るく親切であったが、「その史料は君の研究課題とは関係ないだろう」と、何点かの史料は閲覧させてくれなかった。研究者の見る権利より、修道会の見せない権利の方が圧倒的に強い。公的な文書館ではまずこういった経験はしない。

だからこそアーキビストとの人間関係の構築は、わたしの場合は重要である。調査の成否をわかつといっても過言ではない。史料調査とは、モノを見に行くだけでは終わらない。それとかかわっているヒトとのおつきあいを成立させてこその仕事であると、最近はよく思う。歴史家はヒトが好きであることも、大事な要件である。

バルセロナのイエズス会文書館の入り口

★ スペイン バルセロナ
★ イタリア ローマ

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

特別展
「先住民の宝」

世界には、「先住民」と呼ばれる人たちがいます。先住民とはだれか？「宝」にこめられた思いとは何なのか？ 本展覧会では、日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。

会期　3月19日(木)～6月2日(火)
会場　特別展示館

■関連イベント
ワークショップ

「アイヌの矢作りと模擬狩猟体験」

アイヌの狩猟文化についての講義を聞いたあと、ひとりひとりが矢を制作し、動物に見立てた的に向けて矢を射る体験をします。また、仕掛け弓による実演をとおしてアイヌの知識や技術について学びます。

日時　3月28日(土)14時～16時
（13時30分受付開始）
3月29日(日)10時30分～12時30分
（10時受付開始）
会場　本館第5セミナー室
講師　岡田恵介、山道陽輪（公益財団法人アイヌ民族文化財団 民族共生象徴空間運営本部 職員）
司会　齋藤玲子（本館 准教授）
対象　小学4年生以上（小学生は保護者同伴）
※要事前申込（申込者多数の場合は抽選）、定員各回22名、参加費300円、要特別展示観覧券
※受付期間　2月27日(木)から3月12日(木)まで

「ボードゲームで学ぶ・考える　北極域の環境変化と人」

先住民、開発業者、海洋学者、文化人類学者、漁業者、外交官になりきってボードゲームをプレイします。「トナカイの大量死」「海への油流出事故」……など、次々に発生する問題を乗り切ることができるでしょうか。激変する北極の未来は、どうなる？どうする？

日時　4月4日(土)
①10時30分～12時30分
（10時15分受付開始）
②14時～16時
（13時45分受付開始）
会場　本館第3セミナー室
講師　大石侑香（本館 特任助教）
対象　中学生から大人
※要事前申込（先着順）、定員各回24名、参加無料
※受付期間　2月27日(木)から

みんぱくSama-Sama（サマサマ）塾
プレゼント企画

みんぱくSama-Sama塾塾生によるプレゼント企画。スタンプ・ラリーを完成させた観覧者に、塾生たちが景品をプレゼントします。

日時　3月26日(木)14時～
4月25日(土)14時～
5月24日(日)13時～
会場　特別展示館
※どなたでも対象（景品が無くなり次第終了）
※申込不要、参加無料、要特別展示観覧券

コレクション展示
「朝枝利男の見たガラパゴス
――1930年代の博物学調査と展示」

アメリカの学芸員で写真家の朝枝利男が1930年代に撮影したガラパゴスの風景について、彼の描いた美しい魚の水彩画とともに紹介します。

会期　3月24日(火)まで
会場　本館企画展示場内

ガラパゴスでパイプをふかす朝枝利男

梅棹忠夫生誕100年記念企画展
「知的生産のフロンティア」

みんぱく初代館長を務めた梅棹忠夫が残したアーカイブズ資料とデジタル・データベースをとおして、フィールドワークから著作への「知的生産」をくわしく紹介します。

会期　4月23日(木)～6月23日(火)
会場　本館企画展示場

フィールドノートを内容別に転記したローマ字カード（写真撮影 尼川匡志）

みんぱく春の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス

春の遠足・校外学習にむけて、事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。

日時　4月6日(月)、7日(火)
14時～16時30分（13時50分受付開始）
会場　本館第5セミナー室
※参加無料
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。

お申し込み・お問い合わせ先
国立民族学博物館 案内所
電話　06・6878・8341
（10時～17時）
Fax　06・6878・8441

点字体験ワークショップ

目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション！ 点字体験ワークショップを開催します。

日時　3月14日(土)12時～15時30分
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料
※みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）による催しです。

みんぱく電子ガイド&ビデオテークシステム　リニューアル

3月5日(木)より、みんぱく電子ガイド（携帯型の展示解説装置）とビデオテーク（映像・マルチメディア番組）システムを連動するかたちにリニューアル。新しいシステムでは、日本語・英語の他6言語への対応や展示場内のナビゲーションなど、機能の充実を図りました。

●みんぱく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通送迎バスを特別展「先住民の宝」の会期中に運行します。

運行日　会期中の土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分、無料
運休日　平日、4月25日(土)、4月26日(日)、4月29日(水・祝)、5月2日(土)
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細はみんぱくホームページをご覧ください。

お問い合わせ（本館 広報係）
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401
http://www.minpaku.ac.jp/

みんぱくゼミナール

日時　3月21日(土)13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂
※申込不要、参加無料
第501回
南半球の華僑華人――客家を中心として
講師　河合洋尚（本館 准教授）

21世紀に突入後、南半球では華僑の移住が急増しています。そのうち客家が多いタヒチ、ニューカレドニア、ペルーをとりあげ、中国系新移民の流入による華人社会の変化を解説します。

タヒチにおける春節の獅子舞

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

3月1日(日)14時30分～15時　本館企画展示場
朝枝利男のガラパゴス探検
話者　丹羽典生（本館 准教授）
3月8日(日)14時30分～15時15分
本館ナビひろば、アメリカ展示場
2020年春のアメリカ展示場改修
話者　伊藤敦規（本館 准教授）
3月22日(日)14時30分～15時　本館ナビひろば
風がもたらす異文化接触
話者　久保正敏（本館 名誉教授）
3月29日(日)14時30分～15時　本館ナビひろば
旅と映画とマヤ民族
話者　鈴木紀（本館 教授）
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）

巡回展
「特別展　驚異と怪異
――モンスターたちは告げる――」

会期　4月25日(土)～6月14日(日)
会場　兵庫県立歴史博物館　特別展示室
休館日　月曜日
5月4日(月・祝)は開館
主催　兵庫県立歴史博物館　神戸新聞社
国立民族学博物館
後援　兵庫県　兵庫県教育委員会
NHK神戸放送局　ラジオ関西
サンテレビジョン
協力　山陽電気鉄道株式会社
神姫バス株式会社
特別協力　ライデン国立民族学博物館

※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

刊行物紹介

■広瀬 浩二郎 著
『触常者として生きる
――琵琶を持たない琵琶法師の旅』
伏流社　1,400円（税別）

本書では、「障害者／健常者」という従来の二分法に対し、「触常者／見常者」という新たな人間観を提案します。触常者の立場から取り組む歴史研究、ユニバーサル・ミュージアムの実践とはどんなものなのでしょうか。具体例に即して、わかりやすく解説します。

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会

第499回　4月4日(土)13時30分～14時40分
【特別展「先住民の宝」関連】
トーテムポール――カナダ北西海岸先住民の宝
講師　岸上伸啓（人間文化研究機構理事・本館 教授）
会場　本館第5セミナー室（当日先着96名）

北アメリカ北西海岸地域にある先住民の村々には、動物や人間などの姿を彫りこんだ巨大な木柱が、多数立てられています。それらはトーテムポールとよばれ、現在、ハイダやクワクワカワクゥなど各民族の宝であり、象徴です。トーテムポールとは何か、その歴史的変遷、現在の制作状況とそれに関連するポトラッチ儀礼について解説します。また1972年、そして2020年に立てられる、みんぱくの新旧2本のトーテムポールの制作についても紹介します。

※会員無料（会員証提示）、一般500円
※講演会終了後、特別展の見学会をおこないます（40分／要会員証もしくは特別展示観覧券）。

第500回　5月9日(土)13時30分～15時
【梅棹忠夫生誕100年記念対談】
知的生産のフロンティアの原点
――探検家 梅棹忠夫を語る
話者　石毛直道（本館 第3代館長）、吉田憲司（本館 第6代現館長）
ファシリテーター　飯田卓（本館 教授）
会場　本館講堂（当日先着450名）

国立民族学博物館初代館長 梅棹忠夫は、知的生産的活動において常に新領域を開拓し続けました。知的生産のフロンティアを歩きつづけた梅棹忠夫ですが、研究の根は山からはじまり、その原点は探検にあると述べています。本講演では、探検家としての梅棹忠夫に焦点を当て、石毛直道第3代館長と吉田憲司第6代現館長の対談をとおしてその思想の源をさぐります。

※参加要項は改めてご案内します。

東京講演会

第129回　4月29日(水・祝)13時30分～14時40分
アンデス高地の教会に集う人びとと祭りのすがた
講師　八木百合子（本館 助教）
会場　モンベル御徒町店4Fサロン（要事前申込／先着60名）
※会員無料（会員証提示）、一般500円

想像界の生物相

メンディビルの首長人形

民博 学術資源研究開発センター　八木（やぎ） 百合子（ゆりこ）

資料名	パチャママの聖母
標本番号	H0210692
制作	フアナ・メンディビル、1990 年
地域	ペルー
サイズ	高さ 88cm

ペルー南部のクスコの街に奇抜な格好の人形を作ることで有名な職人の一族がいる。彼らが作るのはおもにキリスト教の聖人や聖母、天使をかたどった人形だが、どれも首が長いのが特徴である。一連の作品は、一族の名前をとって「メンディビルの首長人形」とよばれ、親しまれている。

◆◆◆長い首の由来◆◆◆

首の長いスタイルの人形が誕生したのは二〇世紀半ば。クスコ出身の聖像職人で、工房を切り盛りしていた家長のイラリオ・メンディビル（一九二九～一九七七）が考案したものである。

その着想源は、アンデス高地に棲息（せいそく）するラクダ科動物にある。家族の話によれば、工房があるクスコ市のサン・ブラス地区ではかつて、リャマを用いて農作物などを運んでくる牧畜民や行商人たちの交易が盛んにおこなわれていた。その光景を日々目にするなかで、イラリオの頭のなかに、アンデスを象徴する動物であるリャマやアルパカに似せて、人形の首を長くするという考えが芽生えたという。キリスト教の聖像作りに、アンデス独自の趣向を取り入れた、当時としてはきわめて斬新な発想であった。だが、そのためか、当初は珍奇なものとして、地元では思うように人気が出なかったという。

◆◆◆アンデスの世界観◆◆◆

メンディビルの作品の持ち味は、西洋から持ち込まれたキリスト教文化にアンデス固有の世界観を融合させた独自の作風にある。彼らが作り出す聖人や聖母には、アンデス的な要素が多分に組み込まれている。

なかでも特徴的なのが聖母をかたどった人形である。たとえば、聖母子像では、聖母の腕に抱かれた幼子イエスは、先住民たちが使う毛糸の帽子をかぶり、聖母はしばしば、自ら幼子に乳を与える姿で描かれる。その風貌はアンデスの母子の面影と重なるものである。メンディビルの作品の多くは「処女懐胎」、「イエスの誕生」、「エジプトへの逃避」など、聖書にまつわるエピソードを主題にしながらも、作品自体にはアンデスの人びとが抱くイメージが投影されているのだ。

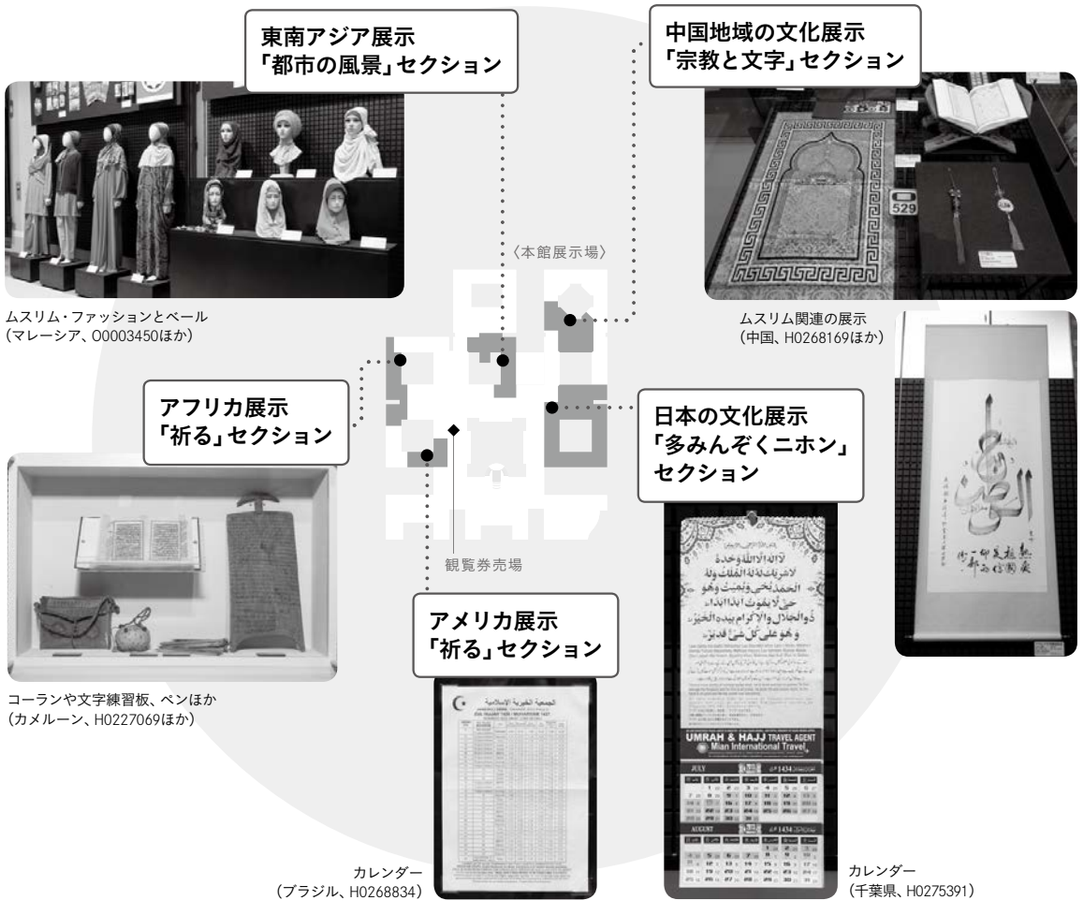
「パチャママの聖母」と銘打つメンディビルの代表作では、聖母のイメージは豊穣と結びつけられ、アンデスの大地の神であるパチャママのイメージに重ね合わされている。その装いは、西洋のスタイルをとりながらも独特のデザインが施してある。衣装の下部には、アンデスの人びとが神聖なものとして崇める山に聖母の姿が刻まれ、すそ野に広がる大地にはヒツジをはじめとする家畜やトウモロコシなどの作物が描かれている。家畜の繁殖と作物の豊穣をつかさどるパチャママは、アンデスに暮らす人びとにとって何よりも大切な存在である。

アンデスの民衆の想像力を結集したメンディビルの作品は、その後、クスコを訪れた文豪ホセ・マリア・アルゲダスの手により、首都リマで紹介されると、多くの知識人たちの目に触れることになった。それがきっかけで、首長人形は、ペルーを代表する芸術のひとつとして評価され、その独創的な作風は今では国内外で知られるところとなっている。

メンディビルの工房の様子。人形作りをしている職人はイラリオ・メンディビル（右）と妻のヘオルヒナ（左）（クスコの箱型祭壇、H0210195、制作：エンリケ・シエラ、マキシミリアナ・パロミノ夫妻）

回回は天下に遍し

民博 超域フィールド科学研究部　奈良 雅史



ムスリム・ファッションとベール（マレーシア、O0003450ほか）

ムスリム関連の展示（中国、H0268169ほか）

コーランや文字練習板、ペンほか（カメルーン、H0227069ほか）

カレンダー（ブラジル、H0268834）

カレンダー（千葉県、H0275391）

一三世紀、東アジアから東欧に至る地域がモンゴル帝国の支配下に置かれたことで東西交流が活発化した。その結果、多くのムスリムたちが自発的あるいは強制的に中国地域にやって来ることとなった。そうしたムスリムたちは「回回」や「色目人」などとよばれた。「回回は天下に遍し」は、中国地域を含むモンゴル帝国の各地にムスリムが暮らしていた当時の状況をあらわすことばである。しかし、今やムスリムの暮らす地域は当時の「天下」を越えて世界中に広がっている。民博の展示場をひと回りしてみると、その広がりを実感することができる。

ムスリムにかかわる展示は八つの展示場でなされている。イスラームの生まれた地域である西アジアやムスリムが多く暮らす中央アジア、東南アジアの展示場では、ムスリムの生活を特徴づける礼拝用絨毯、ベールなどが展示されている。また、南アジア展示場にはモスクの扉、アフリカ展示場にはコーランとそれを学ぶ際に用いられる文房具がある。これらの展示をとおして、ムスリムの物資文化の地域的な多様性を理解することができるだろう。しかし、民博ではムスリムが多く暮らす地域だけではなく、イスラーム的なイメージが強くない地域においてもムスリムに関する展示がなされている。そのひとつにアメリカ展示場がある。

南アジア展示「宗教文化 ── 伝統と多様性」セクションにあるモスクの扉（インド、H0198572）

ラテンアメリカのムスリム

アメリカ展示場では、さまざまな出自をもつ人たちのカレンダーが展示されており、そのなかにブラジル、サンパウロのモスクで配布されていたイスラーム暦のカレンダーがある。このカレンダーは西暦二〇〇六年一月（イスラーム暦一四二六年一二月～一四二七年一月）のもので、日ごとの五回の礼拝時間と日の出の時間が記載されている。イスラームにおける礼拝時間は太陽の位置との関係で決まる。日の出前、正午から物の影の長さが本体と同じになるまでのあいだ、物の影の長さが本体と同じになってから日没までのあいだ、日没後、夕焼けが完全に消えてから寝るまでのあいだといった具合である。

ラテンアメリカの多くの地域はカトリックを基調としており、イスラームについてのイメージはないかもしれない。しかし、その歴史は五〇〇年以上にもおよぶ。ブラジルでは一六世紀から一九世紀半ばまでに西アフリカからムスリムたちが奴隷として連れて来られ、その後、中東地域からアラブ人たちが移住し、ムスリム・コミュニティを形成してきたとされる。

日本のムスリム

日本の文化展示場の「多みんぞくニホン」セクションにも同様にイスラーム暦のカレンダーが展示されている。こちらのカレンダーはイスラーム暦と西暦を併記したもので、断食明けの祝祭などイスラームの祭礼の日程も記載されている。

日本におけるイスラームの歴史は、明治維新以降に始まる。戦前・戦中期の日本政府は、植民地政策を円滑に進めるため、世界各地、特に中国と東南アジアのムスリムを味方につけようと試みた。その一環として、ソ連からのムスリム亡命者などを積極的に受け入れ、モスクやイスラーム学校を建設した。こうして日本国内にムスリム・コミュニティが形成されることとなった。戦後は、イスラーム諸国から多くのムスリムが仕事などで来日した。現在、日本におけるムスリム人口は一〇万人を超え、モスクも全国に七〇以上あるとされる。

ムスリム・マイノリティとカレンダー

さらに中国地域の文化展示場でもムスリムに関する展示がなされている。中国では一〇のイスラーム系少数民族が暮らしており、その人口は二〇〇〇万人以上にもなる。この展示場では「宗教と文字」セクションで、回族（かいぞく）とよばれるムスリム・マイノリティのあいだで使用されるコーランや礼拝用絨毯などの宗教用品、アラビア文字書道作品が展示されている。ここではイスラーム暦のカレンダーは展示されていないが、回族のあいだでもイスラーム暦、中国で使用される農暦、西暦を併記したカレンダーが使われている。

世界各地で暮らすムスリムは、さまざまな歴史的過程を経て、地域的にはマイノリティになっている場合もある。彼らの生活を特徴づけるモノとしてカレンダーが共通してみられることは、彼らが非ムスリムと関係しながら、いかに宗教実践を続けようとしてきたのか、その試みを想像させてくれる。

回族のあいだで使用されていたカレンダー（2009年）

二〇一九年、好評を博した特別展「驚異と怪異」の関連イベントとして開催された研究公演「能と怪異」。能楽師・辰巳満次郎氏と吉田憲司本館館長の対談と、能の演目「土蜘」が実演された。「異界」と「現界」のはざまに立ちあらわれる精霊・鬼・霊獣などの存在を具現する面と演者をテーマとした対談を紹介する。

民博の中央パティオ（中庭）でおこなわれた「動く彫刻」パフォーマンス。演者は石黒実都氏

対談

能と怪異（あやかし）

辰巳満次郎（能楽師）×吉田憲司（本館館長）

司会：山中由里子（本館教授、特別展「驚異と怪異」実行委員長）

辰巳満次郎
シテ方宝生流能楽師。故辰巳孝の次男として出生し父に師事、四歳で初舞台。二〇〇一年、重要無形文化財総合指定認定を受ける。二〇〇五年度大阪文化祭賞奨励賞受賞。

吉田憲司
国立民族学博物館長。専門は博物館人類学、アフリカ研究。ザンビア東部のチェワ社会をおもな研究フィールドとする。二〇一七年四月より本館第六代館長。

面のパワー

山中 今日はアフリカの仮面を研究されている吉田館長と能楽師の辰巳先生の対談という、奇跡的なシチュエーションが実現し、どのようなお話が聞けるか楽しみです。まずは、面（おもて）／仮面の役割について教えていただけますか。

吉田 これまで世界中の仮面を見てきましたが、仮面とは人類にとって普遍的な文化ではありません。でも、仮面がある地域に行くと、それにまつわる習わしはほとんどが同じなんですよね。そういう普遍的な慣習のなかでいちばん共通しているのが、目に見えない世界、自分の知識の届かない世界をいったん見える形にして、それと人間がかかわることで、「異界」の力をコントロールするというものです。

辰巳 我々は能面をつけるとき、変身ということもあるのですが、むしろ空間づくりのほうを意識しています。この場を能の空間にするために何が必要か。装束や、囃子（はやし）も大事ですが、何よりもやはり能面なんですね。

それからもうひとつは、大きな獅子頭（ししがしら）のような「被る」面を被ると、トランス状態になるといわれていますが、能の場合そういうことは一切ありません。今日実演する「土蜘（つちぐも）」で使うのは九〇〇年前の能面ですが、九〇〇年もいろんな人がつけていると「念がこもっているんじゃないか」とか「乗り移ったりしませんか」とよく言われますが、逆に我々はそういうことがないように心がけています。能面をつけると顔とのあいだに空間ができるのですが、その空間で冷静さを保つというか、もう一人の自分がそこに存在するというか。だから能面をつけた方がじつは楽なんです。能面をつけないのを「直面（ひためん）」といって、自分の顔が能面という意識でやるので一切瞬きもしない。これが一番辛いです。「土蜘」の前半に怪しいお坊さんが登場しますが、わたしが直面でやります。つまり、能面をつけてもつけなくても、ここが自分の能面の世界であるというふうに場を一瞬にして決定していく、そういうパワーをもったものとして能面を考えています。

直面で演じる辰巳氏

山中 異界のものを演じる際はご自身も異界を感じておられるのでしょうか。

辰巳 自分自身は異界のなかに入り込まないようにします。例えば神を演じるときに、神の気持ちになるということはありません。ただ、全体をとおして、見る側からそう見えるようにはもっていくわけですね。

山中 アフリカの仮面結社では、演じている人は「自分」を意識しているのでしょうか。それとも、仮面を被ったときにはそれになりきるのでしょうか。

吉田 わたしが加入儀礼を受けてメンバーになったのは、ザンビア東部に住むチェワの人びとの社会にみられるニャウという仮面結社です。誰が仮面を被っているかを明かさず人びとの前に出てくる。死者の化身や動物だといわれますが、踊り手は完全なトランスには入りません。周りで何が起こっているかは、極めてはっきりと認識しています。彼らの場合、「踊ると熱くなる、軽くなる」って言うんですね。ニャウの仮面舞踊というのは、とくに喪が明けるときに踊りますが、彼らは「遺体は人間より冷たいけれども、遺体から離れた死者の霊は熱い」と。それで、仮面を被って踊ると、その死者の霊が自分たちに取り憑く（つく）。熱くて軽く感じるからずっと踊り続けられる、と言う。能と少し違うなと思ったのは、ニャウの人びとは、自分たちは霊に取り憑かれている、軽い憑依（ひょうい）状態だという認識をもっているところです。

身体技法と面

山中 能では声というものもおそらく非常に重要な要素ではないでしょうか。元大阪芸術大学教授の中山一郎（なかやまいちろう）先生が「ボイスチェンジャーとしての能面」という実験をされています。いろいろな面をつけて発した声を録音して周波数をはかり、面の目や口、鼻の穴などから出てくる直接音と、面の脇から出てくる遅延音や半波長といった波長の少しのずれによって、非常に不思議な、痺（しび）れるような音が出て、肉声がちょっと変わった形で聞こえることをつきとめられました。アフリカの仮面舞踊の場合は擬声を使いますよね。吉田先生、実演してみていただけますか。

民博のエントランスホールで実演された「土蜘」の一場面

吉田 （実演）。発声を変えてことばもすべて置き換えて、何を話しているのかわからないようにします。擬声を使うというのは、仮面結社に見られるかなり普遍的な現象だと思いますね。ニャウの場合は明らかに意図的にしていますが、能の場合はそうではないですよね。

辰巳 はい。口元が塞がりますので、観客にストレスなく声を聴いていただくテクニックはあります。例えば、大癋見（おおべしみ）という天狗（てんぐ）の能面は、口は塞がり、目と鼻の穴しかないので本当に音がこもります。そのためどうやって声をはっきり遠くへ飛ばすかという工夫は必要で、面の内部の空間を使って響かせることを考えています。しかし、我々の伝承のなかで能面をつけたときに声を変えるということはありません。「翁（おきな）」という曲がありますが、はじめは能面をつけないで人間として登場してくる。翁の面をつけると神になる。そしてまた途中で取ると人間に戻るわけです。そういった装置として能面を使うことはあります。人間と神とでは自ずと動きが変わりますが、声の出し方を変えるということはほとんど意識していません。

山中 神様の動きと人間的な動きの違いというのは、どういうところにあらわれるのでしょうか。

辰巳 神といっても女なのか男なのか、若いのか老人なのかで違いますが、すり足の仕方、構え方、スピード、そういったもので変えていきます。

吉田 でも、そのときも自分が神になるということはないんですね。

辰巳 人間的に考えています。

山中 ニャウの場合、カモシカを模した被りもの型の仮面ニャウ・ヨレンバを身につけるときは、動物

を模倣したような動きになるのでしょうか。

吉田 それはないですね。ニャウ・ヨレンバは基本的に回転運動なので、動物の動きとは関係がありません。動物の格好をしていますが、むしろ死者の霊に取り憑かれるというふうに考えるわけです。取り憑かれているときには、それなりに意識の変性が起こっているように思いますが、それが先ほどの「熱い、軽い」というものなんですね。生理学的には、単純な運動を長時間反復すると軽い酸欠状態になり、脳内麻薬ともいわれるエンドルフィンやドーパミンなどの神経物質が分泌されることが、すでにいろんな実験で確認されています。それによって起こるある種の変性というものを、ある文化では憑依だと考えるし、ある文化では距離をとらないといけないものだととらえる。

山中 その状態があんまり長く続いたらアブナイですよね。

吉田 エンドルフィンやドーパミンと麻薬の大きな違いは、その刺激がなくなったときに脳内の神経伝達物質の作用が止まるので習慣性がないことです。

辰巳 よかったです（笑）。

対談の様子。左から順に山中実行委員長、吉田館長、辰巳氏

あやかしが主役

山中 次に「あやかし」という概念についてお伺いしたいと思います。

辰巳 日本における「あやかし」というと妖怪の世界まで広がるようですが、能における怪士（あやかし）は――鬼、猩々（しょうじょう）、いろいろありますが――、それらとはちょっと違うと思っています。例えば鬼や龍、蛇（じゃ）は、普通は悪者、人間にとって良くない存在とみなされ、退治されたり首をはねられたりするわけです。ところが能では鬼をはじめとして、退治されるものたち、世にまつろわぬ人、あるいは罪人たちが主役になる。もののけ、怪士の者どもを大事に考えて、なぜそうなってしまったのかという原因を探るんです。怪士を悪とは考えない。むしろ寂しい、悲しい存在の者たちがいる、それを忘れるなという大きなメッセージだと思っています。

この後実演する「土蜘」がまさにそうで、土蜘は権力に刃向かうもの、あるいは先住部族といいますか、もともとそこに住んでいた人たちの総称なんです。

吉田 『古事記』、『日本書紀』などで土蜘蛛（つちぐも）は、大和朝廷に従わない民の総称という使い方をされていますね。能というのは、そういう虐げられたものたちに対する共感……。

辰巳 共感です。「土蜘」は、国家権力からの討伐が正義としても、彼ら先住民には侵略の悲劇であったこと、その悲哀の形が「鬼」で「悪」とイコールではない事を伝えるために作られたと解釈しています。荒れ狂う土蜘の鬼が首を打たれた悲しみというものを少しでも感じていただければいいし、それが日本の良さなのかなと思っています。

吉田 じつは今回、あらためて「土蜘」の謡本（うたいぼん）を読み直していて、はたと幼少のころの体験を思い出しました。自分がなぜ仮面の研究をひとつのライフワークにしたのか。よく考えると、物心つかないころからずっと京都吉祥院天満宮（きっしょういんてんまんぐう）の六斎（ろくさい）念仏を、親父の肩車に乗りながら毎年二回見ていたんですよ。二人（ふたり）獅子（じし）の獅子舞の後、最後が獅子と土蜘蛛なんです。糸を撒（ま）き散らす土蜘蛛がすごくかっこよくて。それまで予祝（よしゅく）のために舞っていた獅子が、最後は土蜘蛛によって殺されてしまう。なぜここで逆転が起こるのかよくわからないのですが、ずっと幼少のころからそれを見ていた経験が、どこかでひっかかっているのだと思います。

山中 それは今回の特別展「驚異と怪異」の展示趣旨にもつながっていると思います。モンスターを退治される対象としてではなく、この世のどこかにいるかもしれない、いてほしいという存在としてとらえる。そういった謙虚さを忘れないでほしい、というのが根底にあるメッセージなんです。

本日はどうもありがとうございました。

※本稿は二〇一九年九月二九日に開催した研究公演「能と怪異」でおこなわれた対談をもとに作成したものです。

月刊みんぱく 2020 3月号

編集後記

札幌の丸井今井で買い物をし、巻頭エッセイで紹介されたショッピングバッグを手にしたときは心が躍った。日本でも先住民の文化、すなわち「先住民の宝」が、おしゃれでカッコいいものと認識され始めたと実感できたからだ。北海道に生まれながら、イランカラプテすら教わらない時代を過ごした者として隔世の感があった。

そうした感触を強くしたのは、昨秋、特集のなかで取りあげられたノルウェーのマーシを訪問したときのことだ。サーミ評議会議事堂、サーミ語放送局はいうにおよばず、小学校、大学、病院、ホテルなどの公共施設にサーミのアート作品が飾られているのに目を見張った。サーミが用いてきた素材や意匠をアートにした作品は、その土地の個性を放ち、自分が今どこにいるのかを喚起してくれる。それはわたしのような訪問者にとってばかりか、そこに住むサーミやそれ以外の人びとにとっても同じだろう。先住民のアートが地域や人びとの心の羅針盤になる。「先進国」にとどまるこうした動向が、「開発途上国」における先住民文化の扱いにも広がってほしい。（南真木人）

●表紙：左上から右へ
1. ウイピル（女性用貫頭着）（キチェ、グアテマラ、H0151857）
2. ナイフ（サーミ、ノルウェー）
3. 木綿製衣服（アイヌ、日本、H0064847）
4. 彫像 つむじ風の精霊（オラン・アスリ、マレーシア、H0276395）
5. トーテムポール（模型）（ハイダ［推定］、カナダ［推定］、H0076170）
6. 舟（タオ、台湾、H0162249）
7. ダカ・ブラウス（ネワール、ネパール、H0276660）
8. 星祭りの柱（モーニング・スター・ポール）（アボリジニ、オーストラリア、H0085810）
9. 化粧品入れ（サン、ボツワナ、H0204631）

次号の予告

特集

「知的生産のフロンティア」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員
『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

ミュージアム会員
『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

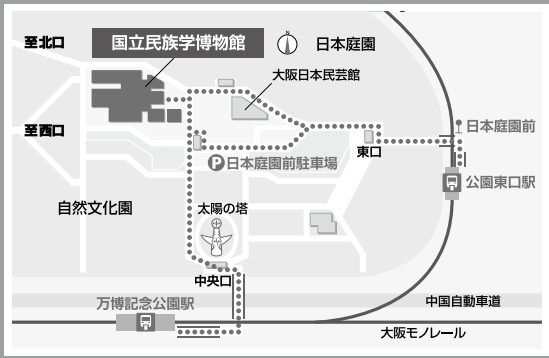
詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06－6877－8893／平日9:00～17:00）

月刊みんぱく 2020年3月号
第44巻第3号通巻第510号　2020年3月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃　菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

まもなく開幕！
特別展「先住民の宝」

世界には、現在70カ国以上の国々に、約3億7,000万人の先住民が暮らしており、その民族の数は少なくとも5,000と言われています。本特別展でいう宝とは、圧政や差別に苦しみながらも、日々を力強く、そして希望を失わず生きてきた彼らにとっての心の拠り所であり、民族としての誇りでもあります。先住民の思いをのせた約740点におよぶ展示品とともに、先住民の世界を紹介します。

また、『ゴールデンカムイ』（原作：野田サトル）珠玉のデジタル原画とともに、作品にも登場するアイヌの民具も展示します。

仮面ラケ（ネワール、ネパール、個人蔵）

特別展図録
『先住民の宝』
編者：信田敏宏
発行：国立民族学博物館
全184頁、B5変形判
予定価格：1,800円（＋税）

ミュージアム・ショップでは図録や関連書籍のほか、オリジナルグッズも販売します。ぜひお立ち寄りください。

国立民族学博物館友の会機関誌
『季刊民族学』171号
特集「先住民のいま」
発行：千里文化財団
全104頁、A4判
友の会会員価格：2,000円（＋税）
一般価格：2,500円（＋税）

関連商品についてのお問い合わせ
国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
e-mail：shop@senri-f.or.jp　水曜日定休